

囲碁で子どもにも日本の礼節を伝えたい

81歳の夢は東京五輪で外国人に囲碁を教えること

シニアライフアドバイザー 松本すみ子

東京都江東区に子供たちに囲碁を指導する「ホテルの碁」というグループがある。代表者は81歳の大町岑生さん。定年後、江東区の小学校などで、現役時代からの趣味である囲碁の楽しさを子供たちに伝えてきた。大町さんの目標は2020年の東京五輪で、訪日外国人に囲碁を教えること。そのために英会話も学び始めた。衰えることがない好奇心で、生涯現役真つただ中だ。

懸命に働いた青春時代

大町さんは昭和12年に中国で生まれた。5歳のときに福岡県へ引き揚げてきたが、空襲で家が丸焼けになるなど、生活は苦しく厳しい時代だったと振り返る。兄弟姉妹は8人。父の職場である三井炭鉱の社宅内をリヤカーで回り、貝を売って家計を助けた。中学校の修学旅行は旅費が出せず、つらい思いもした。

大町さんを高校に進ませるために、姉は自分の進学を取りやめ、紡績工場の女工として集団就職を選んだ。友だちとのお別れ会で、姉が流した涙が忘れられないという。高校での成績がトップクラス



「ホテルの碁」の活動を作った大町岑生さん

だった大町さんは大学に進学したかったが、かなわぬ夢。せめて受験だけでもと、当時の親友と二人で熊本大学を受けた。二人ともみごとに合格。その満足感だけを支えに就職した。

就職難だったが、なんとか八幡製鉄所に合格。しかし、待遇や給与での学歴の差に愕然とした。そこで、九州工業大学の3年制短大夜学を受験し通い始めたが、入社後の学歴は認めないという。それではと、大卒での資格での再就職を夢見て、2部制大学（夜間5年）を受験したが落ちてしまい、夢は途絶えた。悔しさを胸にかかえながらも、実家に仕送りをし、ときには上京してきた兄弟の面倒をみながら、懸命に働いた青春時代だったという。

そんな大町さんにも心ときめくときがやってきた。同じ会社の事務の女性と通勤電車で会う機会が増え、お互いの境遇を話し合うようになったのだ。親への仕送りな

ど苦しい事情に理解を示してくれたこともあり、結婚することに決めた。

彼女を親に紹介するため実家に行くとき、意外にも家族は冷ややかな目線。大黒柱をもっていかれるという思いが強かったらしく、猛反対された。大町さんが24歳、彼女が29歳という年齢差も気にいらなかったようだ。

しかし、反対されればされるほど、気持ちちは燃えあがる。今までは親のいうことをきいてきたが、結婚だけは自分で決めたいと強引に日取りを決めた。結果的には両親も納得し、式に参加してくれたそうだ。

新たな人生のきっかけは囲碁

新婚直後に住んだ家が近所からのもらい火で全焼し、文字どおりゼロからスタートするなど、波乱は続いたが、子どもが生まれ、徐々に生活は落ち着いていった。

昭和46年、34歳のときに東京本

社に転職になった。そこで出会ったのが、囲碁のプロ級腕前をもつ「木村さん」。大町さんは「囲碁を教えてもらったことが、私の人生の分岐点となり、私を救ってくれました」と言う。現役時代は、木村師範にみっちり囲碁を仕込んでもらった。日本棋院学校囲碁指導員の資格もとった。

平成9年に定年を迎えると、今まで感じたことのない「束縛されない自由」と「無職の喜び」を味わった。子供は巣立ったし、もう就職はする気がない。ところが、失業保険をもらいに行ったハロー



幼稚園の囲碁教室